

継 続 は 力 な り

桑島 智[†] (くわじま動物病院副院長・千葉県獣医師会会員)

幼少の頃から、正月、お盆、各種行事で家族が集まると話題は必ず、獣医師会の現状や獣医師の理想像について熱い議論がなされていた記憶がある。

私は千葉県船橋市で祖父、父、叔父とも獣医師である動物病院の家に生まれた。獣医師の始祖は古く、現存する慶応年間作成の家系図によると、平安時代にさかのぼり、初代と伝えられるのは、804年に遣唐使として唐に渡った肥後の国の平仲国である。史書によれば、仲国は唐の馬師皇に馬医の術を師事し、帰国後、その技術を諸国に広めた。戦国時代に入って、仲国の末えいである藤原仲時の代に姓を桑島と改めた。私は仲国から数えて22代目に相当する。祖父の代では牛馬に蹄鉄を装着する装蹄師を兼ねた大動物を中心とした獣医業であった。父の代からは犬や猫などの小動物診療の開業獣医師となった。当時では珍しく、バイクで遠くは銚子や南房総まで足を延ばすこともしばしばだった。そんな多忙な状況のためか、日常生活は病院内で過ごす事が多かった。幼稚園から帰れば犬舎掃除の手伝い、時には往診先まで同乗した。また何もなときは病院の待合室で飼い主とおしゃべりしたり、性教育の一環として避妊手術のレクチャーをされたこともあった。健康な動物をみている反面、数多くの病気の動物を日常的にみてきた。中学2年の頃、膀胱結石に因る排尿障害で苦しんでいるミニチュアシュナウザーが手術によって劇的に改善した。その後の長期的な経過を目の前で観察し、最後を看取りお通夜まで参加し、かけがえのない小さな命の大切さや家族の中のペットの存在の重要さを実感し、獣医師になることを決意した。

大学で所属した外科研究室の、ある教授の退官時の言葉が忘れられなく、今も心の片隅にある。それは「切らない外科医」という言葉である。大学研究室で4年、研修医2年外科一筋で過ごしてきた新米獣医師の私にとっては、興味深い話であった。本当に外科的療法が最善か？ またその診断・検査・予後全てにおいて本当に外科の選択肢が良いのか、さらにペットと飼い主が、手術によって幸せな結果を導くことができるのかを説いた内容であった。実際、現状では本来は外科疾患であるべきものが、内科的治療で良い結果をもたらしたり、またその逆もあることを経験する。既製品のマニュアル治

療、オーダースーツのようなテーラーメイド治療があるならば、後者であるべきと考えている。

ところで、よく動物が好きだから獣医師になったのかと質問される。それには、いつも「動物が好きだけではできないよ」と答える。しかし、本心は好き嫌いではなく「診察台の上に乗せられている動物を上から診るのではなく、同一目線でいつも診ることができ、その心を読む努力ができるから、幸せな仕事なんだよ」と伝えている。飼い主と共に真剣に診察台を見つめながら、飼い主が疑心暗鬼な状態から徐々に変化し、自分と同じ目線で治療に参加してくれた時は至福の喜びである。

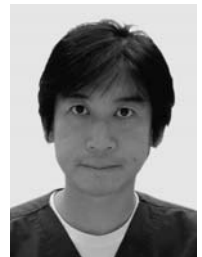
さて、今まで何代も同じ事業を継続してきた老舗的感覚は、私自身は意識したことはない。ただ、獣医師として継続するために大事なこと、重要視すべきことは何かと聞かれたら、「ひたすら真面目、愚直に苦しんでいる小さな命とその家族と向き合い診療することを、常日頃から実践すること」と答える。長い時間をかけて、真心を込めた診察を行ってきたからこそ、飼い主や地域社会との間に信頼関係が築かれ、今があることを思う時、代々継続してきた獣医業を次の世代へ引き継ぐことの大切さを感じる。

我々、獣医師はマイノリティーな職業ゆえにその存在、つまり一人一人の社会的責任が重い職業である。私が所属している千葉県獣医師会では、獣医師の誓い95年宣言を暗唱し、その誓いの意義を再認識するよう心がけている。私達の世代は獣医学教育6年一貫としての初代であり、同期の中には、大学や研究機関等で若き獣医師を育て教育する立場にいるものも少なくない。それ故この内容を遂行し、伝えていく責任があることを自覚し

桑 島 智

— 略 歴 —

- 1990年 麻布大学卒業
- 1990年 都内大学の動物医療センター外科系研修医
- 1993年 千葉県船橋市 くわじま動物病院勤務



[†] 連絡責任者：桑島 智 (くわじま動物病院)

なければならない。今後、さらに時代とともに、変化を求められると思うが、本質は全く変わるものではないと

考える。この至福な仕事を後世に伝えるためにも継続する力をつけなければならない。